国語科の学習指導における「発表会」活性化の工夫について

永　島　典　男

Ⅰ　は　じ　め　に

今日、学習者に興味（関心）をもたせて取り組ませるための指導法の研究が盛んに行われているが、国語科においては、特に、単元学習によってさまざまに配慮した取り組みが見られる。

単元学習は、「生徒の生活の領域（area of living）と教材の分野（subject-matter field）の交渉する座標に、興味ある題目がとり出され、それが機縁となって、生徒は関心を持ち問題を作り、解決の意欲を起こし、自律的な活動（例えば、problem solve の活動）を継続する」のが、その実質であるとされている。(注1) そのために、まず、生徒に価値ある学習の目的aimsを持たせ、それを自分の具体的な到達目標goalsと自覚させるようにする。そして、学習はスタートしたら、もうゴールまで一目散にかける。この意味で、単元学習にとって、まず大切なのは、ゴールの見定めであると言える。(注2)

さて、このゴールには、それまでの学習の成果を共有するための学習 ― 例えば、報告書を書く、新聞を作る、討論会をもつ、等々 ― が仕組まれるのであるが、最も一般的に行われているのは「発表会」（あるいは「報告会」）である。

しかしながら、この「発表会」が生徒の自主的、主体的な学習として生き生きと行われているかというと、実態の多くは満足なものとはいえず、また、指導法についても苦慮されているものの、打開のための研究や調査等もあまりなされていないのが現状である。

そこで、この研究では、これまでの経験から「発表会」が不活発に終わった原因について探り、そこから対策を考えて実践、研究をしていくことにした。

Ⅱ　研究のねらい

この研究は、国語科の学習で行われる「発表会」の活性化を図るためには、指導過程のどこにポイントを置いて、どのような工夫を施せばよいのか、それらを実証的に探ろうとするものである。

Ⅲ　研　究　の　基　盤

これまでの筆者の経験から、「発表会」が不活発に終わった主な原因として、次の点を挙げることができる。

(1)　学習内容が学習者の実態に合っていない（関心の薄さ、学力との不適合）

(2)　発表者が「発表会」に対して不慣れである（発表力の不足）

(3)　聞き手の問題意識が低い（自我関与の意識の不足）

その克服、及び、発表会を活性化させる指導の工夫のポイントとして、次の3点を挙げてみ

たい。

〈工夫①〉　学習者理解を深める……力の弱い、関心の薄い生徒たちもまごつかないでひとりで立ち向かえるように、また同時に、力もあり、意欲も充分の生徒たちが存分に打ち込めるように学習計画を立てようとすると、生徒たちを個別にとらえ、個性を見ていかなければならないことを思い知らされる。つまり、学習者ひとりひとりを理解するように努めることが必要である。ただし、ただ漫然と把握しようとしても簡単になし得るものではない。そこで、「この子なら、こういうやり方でするだろう、こういうこともできるだろう」だから「この学習（仕事）はこの子に」という視点で学習者を見つめ、個性がうまく発揮できるように考える。また、グループ化をする際には、個人個人の特性をみつけ、「この学習（仕事）をさせる時には、だれとだれとを組ませようか」と考えてグループを組ませるようにする。

〈工夫②〉　手引きを活用する……ここでいう「手引き」とは、学習がある目標にスムーズに到達するためにその手助けとなるもの（凡例を示す、糸口を与える、励ましてやる、など）を指し、問題形式になっていて学習者がそれに答えるような〝手引き〟とは、ここでは区別しておきたい。また、一枚の紙に印刷されたものだけでなく、学習のあらゆる機会をとらえて行う統合的なものとして考えているが、ここではとりあえず、紙に印刷したものを対象とすることにする。

〈工夫③〉　学習訓練を徹底する……発表者の発表技術が拙くては、会は盛り上がらない。そこで、能力に適合した課題を与えることも考慮しなければならないが、事前に、教師が学習者の原稿に目をとおしたり、発表の練習を聞いてやるといった細かい指導をして、発表に対する自信をもたせることも必要である。また、発表会が活性化するかどうかは、聞き手の関与の仕方にもかかわっている。したがって、聞き手の問題意識を高めて、発表に対して関心をもたせると同時に、発表会というものには、どのような気持ちで臨むべきか、聞き方はどのような態度で、どこに目を付けて聞けばよいのか、といった指導を充分にしておかなければならない。

Ⅳ　実　　践（学習指導計画構想の足跡）

ここでは、学習指導計画をどのように構想したか、その変遷の足跡を中心に記していきたい。

1.　単元名　古典への招待

2.　目　標　○古典の作品を自分で読んだり調べたりすることを通して、古典に親しむ。
○聞く人に分かりやすく、かつ人を楽しませるような発表の仕方を工夫する。
○発表の内容を自分の知識と関連づけたり、まとめたりしながら聞く力と習慣を身につける。

3.　学習指導計画構想の足跡

(1)　単元を組むまで

教科書（『現代の国語　中学二年』三省堂）

単元名　昔の人々

教　材　・「保昌と袴垂」（今昔物語集より。初めと終わり３分の１ほどが原文）
・「苛政は暴虎よりも猛し」

虎の威をかる狐（戦国策より。口語訳のみ）

苛政は暴虎よりも猛し（孔子家語より。書下し文に語釈付き）

・「つれづれなるままに」

つれづれなるままに……（徒然草より。序段）

手のわろき人の、はばからず文書きちらすはよし……（同　第35段）

よき友三つあり……（同　第117段）

丹波に出雲といふ所あり……（同　第236段）

そして、この単元のとびらには、「昔の人々は、それぞれの時代・社会の中で、どのように生きたのであろうか。ことに、歴史の変動期に生きた人々の行動や思考に触れて、人間についての考えを深めよう」と記してある。この単元のねらいや教材の選択は、学習指導要領（現行）に、「古典の指導については、古典に対する関心を深め、古文と漢文を理解する基礎を養うようにすること。その教材としては、古典に関心をもたせるように書いた文章、短くて易しい文語文や格言・故事成語、親しみやすい古典の文章などを適宜用いるようにすること」とあるのによったものであろう。

しかしながら、このような単元の組み方では、それぞれの教材の関連性が薄く、そのために単元全体としての力のようなものが伝わってこない。実際にこの単元を指導した場合には、おそらく個々の教材を切り離して扱わざるをえなくなり、結局、〝訓釈〟の読みに傾きがちなる。生徒に読み取りの力があり、かつ古典への関心が高い場合にはこれでもよかろうが、現在の大半の中学生には無理である。古典を学習したために、かえって〝古典嫌い〟を助長しかねない。

中学校の古典の指導は、中学校指導書国語科編にも、「関心をもって文章を読み、古典への親しみを深める学習過程で、古文や漢文を理解する基礎が養われるように配慮することが重要である」（105ページ）とあるように、「古典に関心をもって文章を読み、古典への親しみを深める」というところに目標を明確に見定めることが肝要であろう。（新教育課程では、「古典に親しむ態度を育てる」と、ねらいの一番に記されている。）

古典学習の目標を、上記のように「古典に親しむ」ことに据えた場合には、広い意味で何らかの作業を通して作品に触れさせることを考えなければならない。

実際の構想の過程では、上述のように考えながら、一方で資料の複数化を検討した。学習者たちは、一年生時には、教科書（三省堂）で単元『祖先の姿』― 内容は、川柳、いろはガルタ、格言、故事成語、「敦盛の最期」 ― を学習している。この生徒たちを、古典に親しませるために、ぜひ古典作品の森の中に連れて行き、さまざまな古典作品に触れさせたいと考えた。そこで、初め十幾つの作品を候補にあげたのであるが、指導者自身の力量や負担等から検討して次の七つに絞った。「万葉集」「竹取物語」「枕草子」「古今和歌集・新古今和歌集」「今昔物語集」「平家物語」「徒然草」。

では、これらの作品にどのように取り組ませるか。当然、作品全部をひとりひとりに読ませることは無理であるし、「古典に親しませる」ためにはその必要もない。生徒の興味や指導のねらいによって、これをというものを与えていけばよい。七つのグループを作り、そのグルー

プごとに調査や練習・話し合いなどをさせ、最終的にはグループの学習の成果を「発表」させようと考えた。

(2) 台　本　作　成

単元のイメージがしだいにできあがってきた。この単元では、それぞれ（のグループ）が、ある作品について理解を深め、それをもとに聞き手をその世界に招待する、そして、全体としては、互いが互いを古典の世界に招待し合う、というかたちにしようと考えた。

そのためには、生徒たちに初めから一冊の本を与える、そして、その中には調べることや練習すること、話し合うことなどを組み込んでおく、さらに、その本は発表の際に用いるように発表用の台本の形式に作る、というふうに決めた。

次に、七つの作品（群）のそれぞれの台本の内容の概略と、例としてその一部を掲げる。

「万葉集」

① 「あかねさす……」（額田王）の歌から入る。歌の背景や詠み込まれている心情など。

② 万葉集について（成立、歌数、歌体、主な歌人など）。

③ 「春過ぎて……」（持統天皇）の鑑賞。百人一首の歌との比較。

④ 柿本人麻呂と島根とのかかわり。

⑤ 長歌「天地の……」（山部赤人）と、反歌「田児の浦ゆ……」（同）の朗読。

⑥ 山上憶良と、その歌の鑑賞。　⑦ 東歌一首と防人歌二首の鑑賞。

⑧ 和歌を現代詩になおしてみる学習。　⑨ 暗唱の発表。

「竹取物語」

① 「かぐや姫」の語りから入る。紙芝居か絵本を使って。

② かぐや姫の生い立ちの部分。原文朗読と口語訳とを交互に朗読。

③ かぐや姫の成長について説明。　④ 蓬莱の玉の枝の部分の原文朗読。解説入りで。

⑤ その他の部分。掛け合いのかたちで。　⑥ かぐや姫昇天の部分。原文朗読と口語訳とで。

⑦ 感想の発表。　⑧ 暗唱の発表。

「枕草子」

① 冒頭部分の朗読。　② 清少納言について（父、生涯）。

③ 冒頭部分の朗読と解説、印象の話し合い、調査の報告など。

④ 冒頭部分の暗唱と感想の発表。

⑤ 「うつくしきもの」（第151段）の鑑賞。　⑥ 「うつくしきもの」の現代化。

「古今和歌集・新古今和歌集」

① 百人一首をしている雰囲気から入る。百人一首と古今・新古今集との関係。

② 「人はいさ……」（紀貫之）の鑑賞と解説。

③ 「ひさかたの……」（紀友則）の鑑賞。

④ 古今集について（成立、編者、歌数、歌の特徴）。

⑤ 「秋きぬと……」（藤原敏行）の鑑賞。　⑥ 平安朝の人々と季節感について。

⑦ 「うたた寝に……」（小野小町）「見渡せば……」（藤原定家）の鑑賞。

⑧ 新古今集の歌の特質。　⑨ 「心なき……」（西行法師）の鑑賞と、西行法師について。

⑩ 「玉の緒よ……」「山深み……」（いずれも式子内親王）の鑑賞。

⑪ 暗唱の発表。

「今昔物語集」

① 今昔物語集について。芥川龍之介の既習の作品や「鼻」から入る。

② 「実因僧図の強力」の内容理解。途中に劇化を入れる。

③ 感想の発表。　④ 今昔物語集について独自に調べたことの発表。

⑤ 暗唱の発表

「平家物語」

① 書き出し部分の朗読から入る。　② 平家物語について（背景、伝わり方）。

③ 「耳なし芳一のはなし」の一部を朗読。　④ 以前に学習した「敦盛の最期」を思い出す。　⑤ 「那須の与一」の場面を生き生きと影絵にして発表する。

⑥ 冒頭部分「祇園精舎の……心も詞も及ばれぬ」を暗唱して発表。

「徒然草」

① 序段の暗唱の発表から入る。序段について解説も。　② 「徒然草」の内容について。

③ 「堀池の僧正」について鑑賞したり、後日譚を考えたりする。

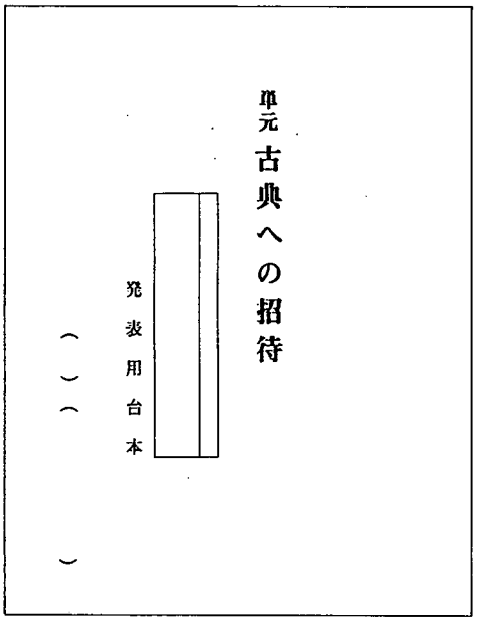
④ 「高名の木のぼり」を鑑賞する。自分たちの生活に引き寄せて考える。

⑤ その他の段の話を紹介する。　⑥ 吉田兼好の人物イメージを絵に描く。

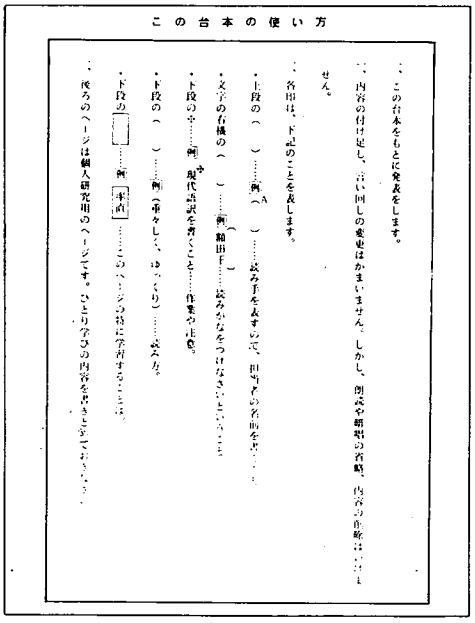
⑦ 「堀池の僧正」と「高名の木のぼり」の暗唱の発表。

台本の例

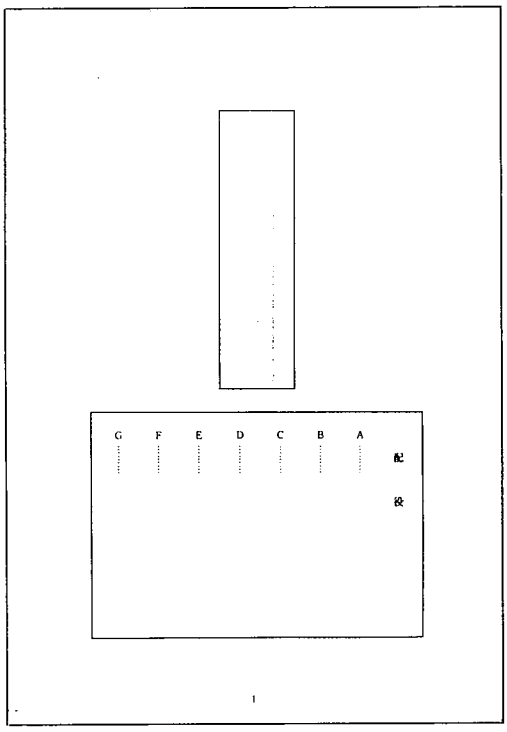
資料1. 表紙（共通）



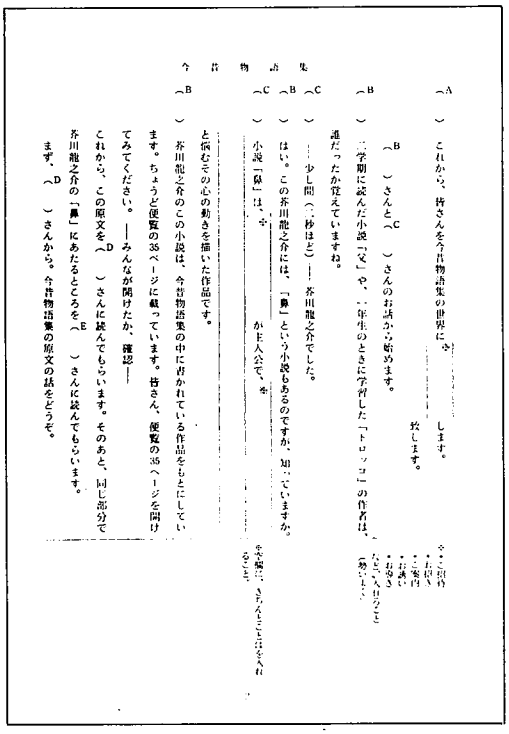
資料2. 表紙裏（共通）

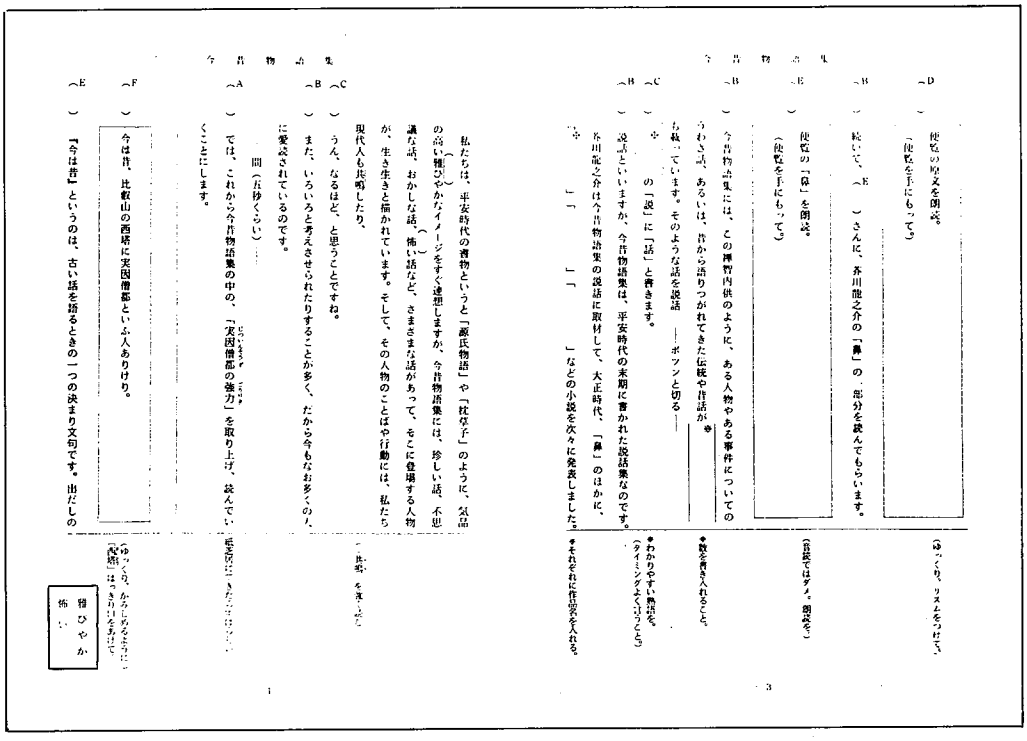


資料3.　とびら（共通）



資料4.　「今昔物語集」の場合





台本は、作品（群）ごとに分けて印刷、製本をした。そうして、生徒には自分の担当した作品（群）の台本だけが手渡される。

このようにして、台本を作りながら、同時に、資料と手だてを考えていった。どんな資料と出合わせて調べさせるか、発展学習への手がかりはどうするか、どんな言葉をどれだけ使って考えさせるか、台本を生かすためにはどこにポイントを置くか、などと。

また、台本作りを進めながら、一方で、出演者について、次のようなメモもしていった。

資料5.　メモ「竹取物語」の場合

A ◎ 女子	話し方の巧みな者 書くことも得意
昔話「かぐや姫」、ある筋を書いて読む 説明、感想、原文の朗読	
B ○	しっかりした者、落ち着いて話せる明快でよく伝わる声
全体の進行、感想	
C △	原文の朗読、問答一答える、感想
D △	原文の朗読、問答一答える、感想
E ○	原文の朗読、問答一問う、現代語訳
F ○	Bの次にしっかりしている者、 すすんで書く者、書く力のある者
あらすじを書いて読む、進行役も、現代語訳	
G ○	現代語訳、朗読

資料6.　メモ「平家物語」の場合

A ◎ 男子 原文の朗読	かなり力のある者、演技力のある者
B ○ 男子 原文の朗読	演技力のある者
C ◎ 女子 ナレーター	ことばを明瞭に発言できる者
D △ 男子	語り口調で読める者
E ○ 説明、感想	音読のスラスラできる者
F ○ 進行、感想	詳しく感想が書ける者
G △ 男子 朗読（耳なし芳一）	個性的な者（ユーモアのある者）

(注)　アルファベットは仮想の生徒を、◎○△は総合的な国語力を表す。

学習者の訓練（学習訓練）ということが、これまでは案外おろそかにされがちであった。そのために、本番になってあわてたり、目に見えない大切な発表の場の緊張した空気を緩めたりする元になっていたのではなかったか。そこで、

ア、台本の学習に入る前に、発表の仕方に慣れさせておく。

イ、聞き手となった際にどのように聞くかの練習をさせておく。

ウ、準備の際に、個人面接を徹底して行い、朗読の力をつけたり、発表のコツをつかませておくことにした。

(3) 最終的な指導計画

こうして、最終的に、次のような指導計画を立てた。

事前調査　7つの作品グループについて、読んだ経験の有無、作品についての知識を調査する。教科書に載っている「保昌と袴垂」「つれづれなるままに」を指導者作成のテキストによって一読後、仮名遣いや簡単な読み取りのテスト をする。

第二次　「中学生の国文学史」（これは雑誌『中学生の文学』昭和52年5月から7回にわたって連載されたもの。上下2段組で28ページ）を使って、古典文学史の発表とそれを聞き取る学習をする。

この作品は、いとこどうしの秀夫と節子（いずれも中学生）が文男おじさんを訪ねて日本文学の発生や歴史について聞く、「ゼミナール」のようなもの。初めから台本のかたちになっている。これを、秀夫役、節子役を毎回決めて、文男役の指導者と3人で、発表をする。

発表中には、聞き手の生徒たちにはテキストを見ないようにさせ、もっぱら耳を通して理解させる。その代わりに、難しい語句は前もって紙に書いておき、その日の掲示係に掲示をさせる。発表後には、指導者から内容について問い（5問）を出し、それに答えさせる。

※資料7、8を参照

第二次　グループの希望調査に答える。※資料9を参照

第三次　台本を一通り読む。※資料10を参照

第四次　グループになって学習の計画を立てる。※資料11. 12. 13. 14. 15を参照

第五次　グループ学習・個人学習・個人面談を進める。※資料16. 17. を参照。

第六次　学習発表会を開く。

順序は次の通りとする。

① 発表要領を配布する。

② 発表をする。

③ 発表者から問題を出す。聞き手はそれに答える。

④ 発表について評価をする。

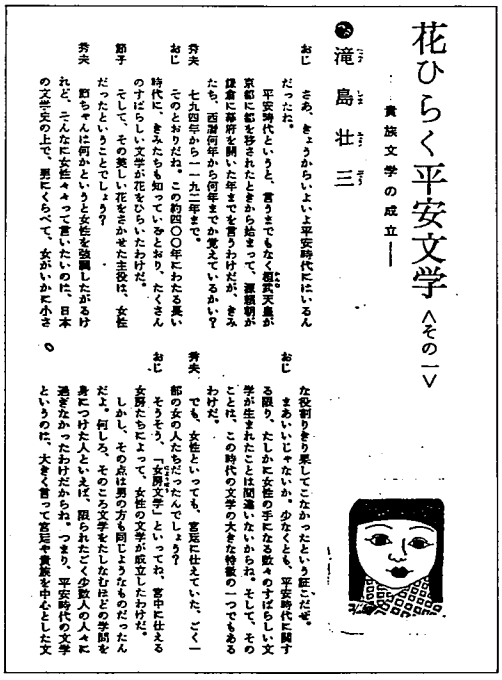
⑤ 質疑応答、リクエスト、全員で暗唱などをする。

（発表後は後日、回答や評価の集計、及び反省をする。

※資料18. 19を参照

第七次　単元のまとめをする。

資料7.　「中学生の国文学史」より



花ひらく平安文学 〈その一〉

貴族文学の成立——

滝島壮三

おじ　さあ、きょうからいよいよ平安時代にはいるんだっただね。

平安時代というと、言うまでもなく桓武天皇が京都に都を移されたときから始まって、藤原朝が鎌倉に幕府を開いた年までを言うわけだが、きみたち、西暦何年から何年までか覚えているかい？

秀夫　七九四年から一一九二年まで。

おじ　そのとおりだね。この約四〇〇年にわたる長い時代に、きみたちも知っているとおり、たくさんのすばらしい文学が花をひらいたわけだ。

節子　そして、その美しい花をさかせた主役は、女性だったということでしょう？

秀夫　節ちゃんに何かというと女性を強調したがるけれど、こんなに女性々々って言いたいのに、日本の文学史の上で、男にくらべて、女がいかに小さな役割りをきり果してこなかったという証こだぜ。

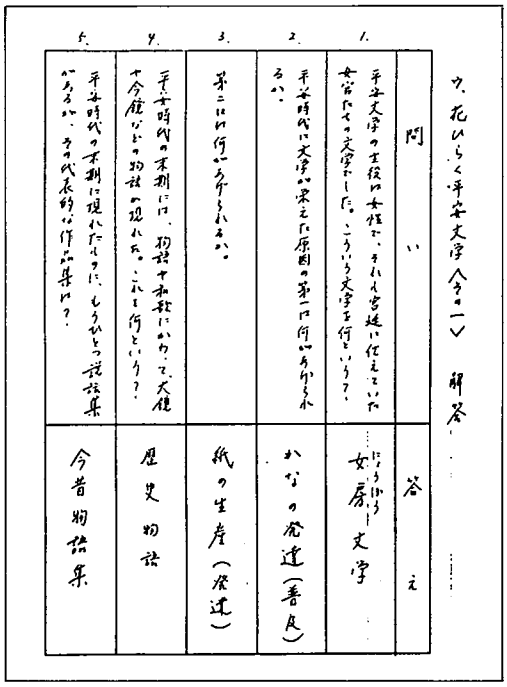
おじ　まあいいじゃないか。少なくとも、平安時代に関する限り、たしかに女性の手になる数々のすばらしい文学が生まれたことは間違いないからね。そして、そのことは、この時代の文学の大きな特徴の一つでもあるわけだ。

秀夫　でも、女性といっても、宮廷に仕えていた、ごく一部の女の人たちだけだったんでしょう？

おじ　そうそう、「女房文学」といってね、宮中に仕える女房たちによって、女性の文学が成立したわけだ。

しかし、その点は男の方も同じようなものだったんだよ。何しろ、そのころ文学をたしなむほどの学問を身につけた人といえば、限られたごく少数人の人々に過ぎなかったわけだからね。つまり、平安時代の文学というのは、大きく言って宮廷や貴族を中心とした文

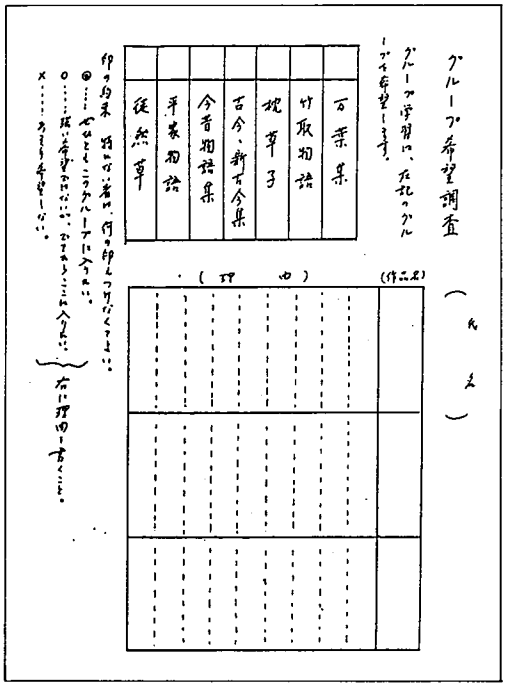
資料 8.　「中学生の国文学史」に関する問いと答え



ウ、花ひらく平安文学〈その一〉　解答

	問い	答え
1.	平安文学の主役は女性で、それを宮廷に仕えていた女房たちの文学でした。こういう文学を何という？	女房（にょうぼう）文学
2.	平安時代に文学が栄えた原因の第一は何かあるか。	かなの発達（普及）
3.	第二には何かあるか。	紙の生産（発達）
4.	平安時代の末期には、物語や和歌にかわって大作今鏡などの物語が現れた。これを何という？	歴史物語
5.	平安時代の末期に現れたもう一つの説話集があるが、その代表的な作品集は？	今昔物語集

資料 9.　グループ希望調査



グループ希望調査

（　　名　　）

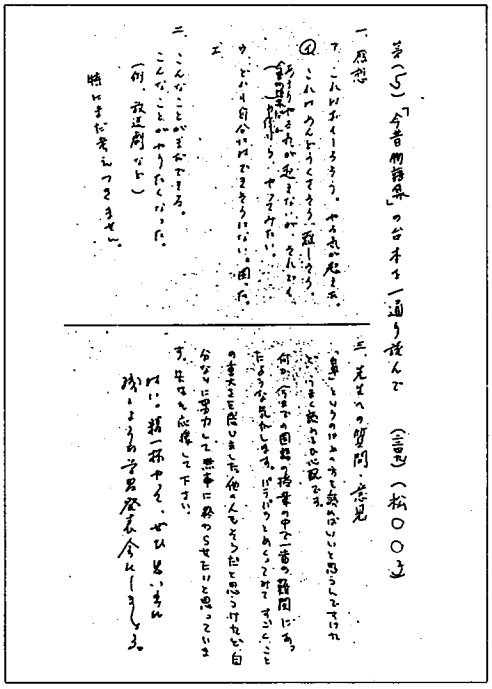
グループ学習に、次のグループに分れて希望します。

万葉集	
竹取物語	
枕草子	
古今、新古今集	
今昔物語集	
平家物語	
徒然草	

（理由）　（作文名）

印の意味　特に強い者は、何の印をつけなくてよい。
◎……ぜひとも、このグループに入りたい。
○……強く希望するが、かりにもしここに入れなければ、右に理由を書くこと。
×……あまり希望しない。

資料 10.　台本を一通り読んで



第（5）「今昔物語集」の台本を一通り読んで　（三年）（松○○子）

一、感想

ア、これはおもしろいなあ。やっぱり昔の人はこんなことをしていたのだ。

イ、これは、ちょっとやってみたい。

ウ、どれか自分にはできそうにないなあ。

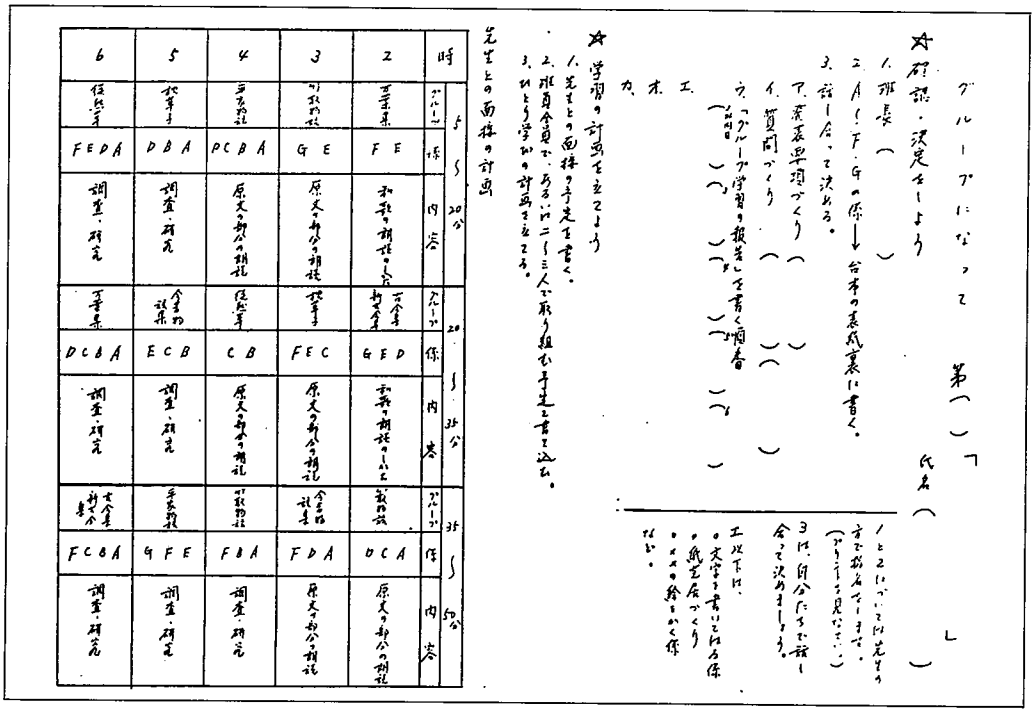
エ、

二、こんなことがぼくにもできる。
こんなことをやってみたくなった。
（例、放送劇など）
時にはぼくも考えてみます。

三、先生への質問・意見

一番こまったのは、ふりがなをつけなければならないと思うことでした。
どうしてもよめないものもあるから。
何か、今までの国語の授業の中で一番の難問にあったような気がします。ばらばらとめくってみて、すごいことの書いてあるのにびっくりしました。他の人もそう思ったかもしれないが、自分なりに学力して、思ったことを発表したいと思っています。
先生も応援して下さい。
はい。精一杯やるぞ。ぜひ思いきり
頑張ってください。
次は、源氏物語を読みたいなあ。

資料11.　手引き「グループになって」



グループになって　第（　）「　　」

氏名（　　）

☆確認・決定をしよう

イ．班長（　　）

ロ．A〜F．Gの係↓台本の表紙裏に書く。

ハ．話し合って決める。

ア．発表要項づくり（　　）

イ．質問づくり（　　）（　　）

ウ．「グループ学習の報告」を書く順番

（　　）（　　）（　　）（　　）（　　）（　　）

エ．

オ．

カ．

☆学習の計画をたてよう

イ．先生との面接の予定を書く。

ロ．班員全員で、あるいは二〜三人で取り組む予定を書き込む。

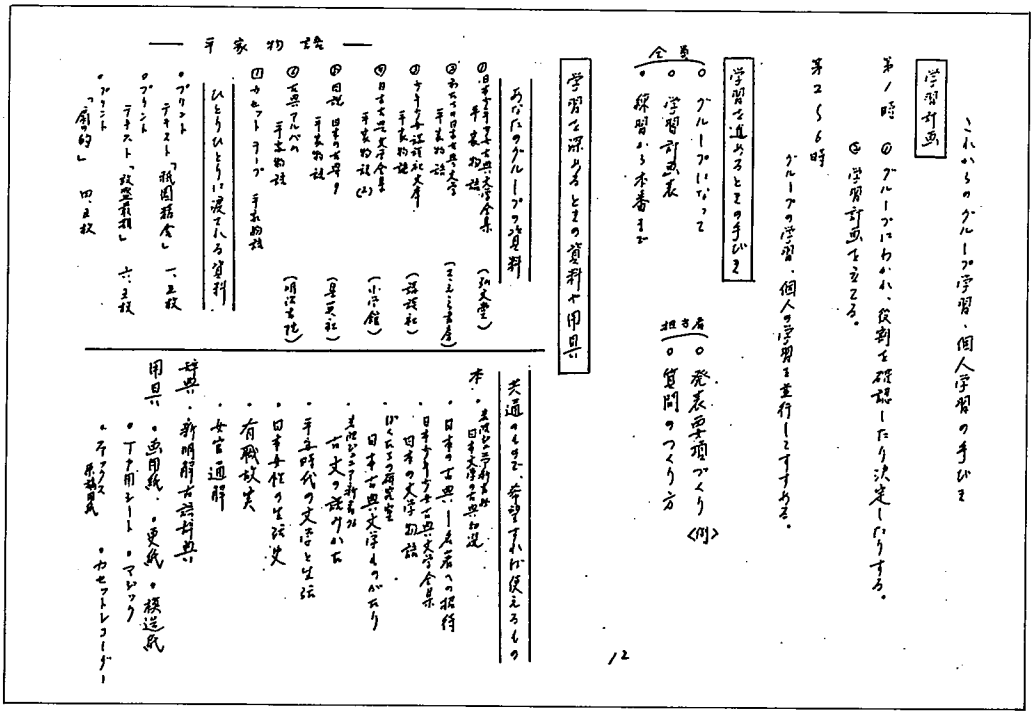
ハ．ひとり学習の計画をたてる。

先生との面接の計画

時		5	6
5〜20分	グループ	平家物語	任意学習
	係	F E	F E D A
	内容	和歌の朝廷における意味	調査・研究
20〜35分	グループ	六代の事	平家物語
	係	G E D	D C B A
	内容	和歌の朝廷における意味	調査・研究
35〜50分	グループ	義経伝説	大会を終えて
	係	D C A	F C B A
	内容	原文の部分の朝礼	調査・研究

3	4	5	6
平家物語	平家物語	平家物語	任意学習
G E	P C B A	D B A	F E D A
原文の部分の朝礼	原文の部分の朝礼	調査・研究	調査・研究
平家物語	任意学習	今まの総集	平家物語
F E C	C B	E C B	D C B A
原文の部分の朝礼	原文の部分の朝礼	調査・研究	調査・研究
今まの総集	平家物語	平家物語	大会を終えて
F D A	F B A	9 F E	F C B A
原文の部分の朝礼	調査・研究	調査・研究	調査・研究

資料12.　「これからのグループ学習、個人学習の手びき」（「平家物語」の場合）



これからのグループ学習・個人学習の手びき

学習計画

第1の時　①グループにわかれ、役割を確認したり決定したりする。

②学習計画をたてる。

第2〜6時　グループの学習・個人の学習を並行してすすめる。

学習を進めるときの手びき

全員　○学習計画表

○課題から本番まで

担当者　○発表要項づくり〈例〉

○質問のつくり方

学習を深めるときの資料や用具

あなたのグループの資料

①日本古典文学全集　平家物語　（小学館）

②あなたの日本の文学　平家物語　（三省堂書店）

③ナショナル社頭文庫　平家物語　（旺文社）

④日本古典文学全集　平家物語（上）（小学館）

⑤国語　日本の古典　平家物語　（東京書籍）

⑥古典アルバム　平家物語　（明治書院）

⑦カセットテープ　平家物語

ひとりひとりに渡すべき資料

・プリント　テキスト「祇園精舎」　一、五枚

・プリント　テキスト「殷紂王義朝」　六、五枚

・プリント「劇的」　四、五枚

共通のもので、希望すれば使えるもの

本・古典に関する新書

・日本の古典　一条兼良への旅行

・日本古典文学全集　平家物語

・日本の文学　説話

・ひくらさうの源氏物語

・日本古典文学　えりかえり

・古典に関する新書

・平安時代の文学と生活

・日本女性の生活史

・有職故実

・女官通解

・古典に関する新書

用具・新明解古語辞典

・画用紙・更紙・模造紙

・丸用シート・マジック

・カセットレコーダー

資料13.　手引き「練習から本番まで」

〔練習から本番まで〕

▽発表の練習のときから気をつけること　△

○声の大きさ
教室の一番後ろまでとどくような声の大きさで。

○間のとり方
長い間合い、短い間合い
数をかぞえたり、聞き手の動きを見て

○その場の空気を知って話す。

○自分の話や朗読が、聞き手にどう受けとめられているか、観察をしながら。

○並び順、発表の位置などに細かな配慮を。
固定しないで、場面によって変化をもたせる。

◎発表者は全員、演技者です。演技に工夫を。
また、必要に応じて、だれかが演出家になってみましょう。

▽本番の発表の際に気をつけること　△

○指示がなくて、自分たちのグループの発表ということになったら、
人の顔など見ないで、かってがってしないで、サッサと前に出る。

○前に並んだから、横の人と話したりしない。堂々としている。

○初めの
あいさつは、事前に準備しておく。
×これから第○グループの「メメメメ」の発表を……　×自信はありません

気がまいって、雰囲気が明るくなるものを。

○台本は胸の前に広げる。
高く持って、顔を隠すようにしたり、下を向いてすわるのはよくない。

○自分の役割でなくても、本番では思わぬことが起きる。機転をきかせること。
応用力を働かせること。

○発表から質問へ、サッと移ります。

資料14.　手引き「発表要項づくり」

発表要項づくり

第八「奥の細道」グループ

〈例〉

一、発表の聞きどころ、見どころ
朗読・鑑賞
ア、奥の細道への出立の場面
松尾芭蕉の旅まえへの不安と決意
イ、松島の場面
現地までの松島高校生有志の文章
松島の写真（大版）で準備しました。
ウ、平泉
この句合も名文との評判の部分
「夏草や つはものどもが夢の跡」
ひとおもいにひびいていいなぁ　鑑賞します。お楽しみに。

二、発表の流れ
朗読・創作
発表の途中に、丸谷教授、いっしょに旅にあるいた丸谷になってもらえるよう、「ある日の芭蕉と曽良」の会話を聞いてもらいます。

一、発表の聞きどころ、見どころ
・ここにわたくしたちのグループの発表のポイントがあります。
・こんなふうに工夫をしました。
・こんなふうに聞いて（見て）ほしい。
など、聞く人に興味をもたせるように。

二、発表の流れ
・どんな内容を
・どんな方法で
・どんな順序で

三、質問に備えて
・こんな視点から
・こんなふうに聞いてほしい。

三、質問に備えて
われらの発表では、芭蕉は旅をおりとりえていたかを中心に組み立てました。いろいろな学者の説を紹介しますので、そのところは特に注意して聞き、メモをとって下さい。

資料15.　手引き「質問のつくり方」

▽質問のつくり方△

質問をなぜ出すのか

質問を出して、聞いた人は問うてみる点、次のような理由があります。

◎　これだけは必ず知っておいてほしい、理解してほしいということを、そう言うわけに質問の形にする。

◎　自分たちの発表を、どんなふうに聞いてくれたか、それが正しく、深く聞いてくれたかを知り、自分たちの発表の反省材料とする。

です。から、

・小さなこと

・あまり重要でないこと

・その作品を読み味わうのにそれほど関係のないこと

は、質問の対象からはずして、

○　ぜひこのことは、ということを質問しましょう。

質問の数は五つ。　なお、言うまえなく、質問者指名は（教）がします。

古典・文学史の発表のときのような用紙を、先生の方で準備します。

質問に答える欄のなかはあれくらいと考えておきなさい。

発表・評価については、古典・文学史のときと評価規同で少し考えて、次のようにします。これらについて、聞いていた人たちに評価してもらうわけです。

○　準備がトリうぶんにできていたでしょうか。

○　積極的に進んで発表していたでしょうか。

○　声の大きさ、間のとり方はどうでしたでしょうか。

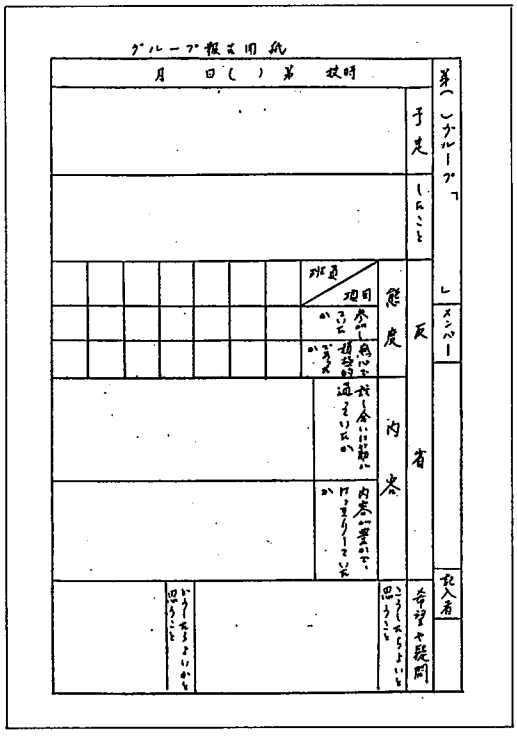
○　その場の空気を知って話すことができたでしょうか。

○　ことばづかいは適当なものでしょうか。

○　動作や暗唱はじょうずだったでしょうか。

○　発表は細かい配慮が見られたでしょうか。（主が相、発表の仕方）

資料16.　グループ報告用紙



資料 17.　手引き「班長の〇〇さんへ」

班長の　　さんへ

発表の日が近づきましたね。
あなたの班の発表がりっぱにできますように願っています。
次の点をもう一度チェックしてみましょう。

1. A・S・F、Gの人たち、それぞれが自分の台本の空欄を全て埋めていますか。
　YES、NO →すぐ先生の所へ来るように伝えてください。
2. 朗読担当の人は、覚えるくらいに読みこなしていますか。
　YES、NO →頑張ってください。
3. 暗唱はもうトップランですか。
　YES、NO →必要のある人は手伝ってあげましょう。
4. 発表用の道具（例えば、図、絵、紙芝居、難しい読み方など）は、もうできあがっていますか。
　YES、NO →仕上がり具合が遅ければ、班員みんなで協力して。
5. 発表原稿はもう書き上がって、先生に印刷を頼んでありますか。
　YES、NO →わからない所は先生に相談に来るように伝えてください。
6. 発表用のプリント（メモ手元にあったら）は、書き上がって先生に印刷を頼んでいますか。
　YES、NO →協力してあげましょう。
7. 発表の隊形・位置・並び順・用具の分担など、台本にそって細かく決めて練習しましたか。
　YES、NO →〇〇日の〇〇時からしましょう。と時間がかかってごめん。
8. 劇や紙芝居などの練習は、もうじゅうぶんですか。
　YES、NO →練習時間をすぐ作って、みんなに伝えましょう。
9. 初めのあいさつ、終わりのあいさつは考えてありますね。

では、本番の発表を、楽しみに待っています。

永島　典男

資料 18.　発表を聞いて

発表を聞いて

第（　）「　　」グループ（　）（　）（　）

質問に答えてください。

1.

2.

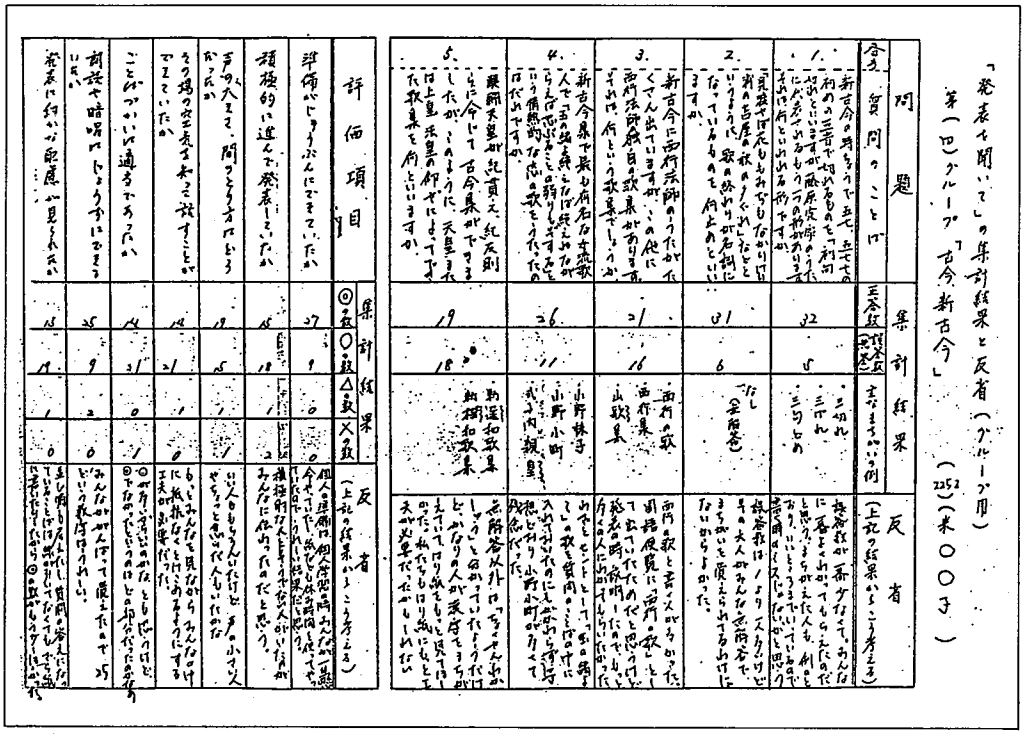
3.

4.

5.

評価項目	評価 ◎○△×	特に優れていた者
準備がどうぶんにできていたでしょうか		
積極的に進んで参加していたでしょうか		
声の大きさ・間のとり方はどうでしょうか		
その場の空気を読み、ことばがはっきりしていたでしょうか		
ことばづかいは適当だったでしょうか		
朗読や暗唱はどうすばらしかったでしょうか		
発表は和やかに配慮が見られたでしょうか。（まとめ・関心）		

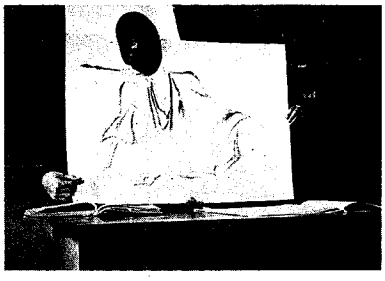
資料19.　「発表を聞いて」の集計結果と反省（グループ用）


「発表を聞いて」の集計結果と反省（グループ用）
第（四）グループ「古今・新古今」
（225名）（米○○子）

問題	集計結果	反省
1. 新古今の時代は五七、五七七の句の三句や切れのものを「初句」といいますが、藤原定家のように、どんなものが初句の特徴ですか。	32	「見渡せば花ももみぢもなかりけり」の苫屋の秋の夕ぐれとなどというように、歌の終わりが名詞になっているものも何句めといいますか。
2. 新古今に西行法師のうたが何くらい出ていますか。この他に西行法師作の歌集があります。それは何という歌集でしょうか。	31	6
3. 新古今歌集や長歌・短歌など百人一首の歌集がありますが、新古今歌集の中で、古今集の歌人で、百人一首にはいっていない人の歌を一つ、その理由を簡単に説明しなさい。	21	16
4. 藤原定家が記した、定家仮名遣いに今にて古今集がやすまれたのは、天皇の御代によってですか。	26	11
5. 上皇、天皇の御代によって歌集を何といいますか。	19	18

評価項目	集計結果 ◎数	○数	△数	×数	反省（上記の結果からこう考える）
評価がじょうぶにできていたか	27	9	0	0	個人の評価は、個人学習時、みんなが一生懸命やっていたから、発表時もみんなが一生懸命やっていたから、良い結果になったと思う。
積極的に進んで発表していたか	18	18	1	2	積極的な人とそうでない人がいたが、みんなは、頑張っていたのだと思う。
声の大きさ、聞こえるようになったか	19	5	7	1	いい人ももちろんいたけど、まだ、小さい人やちょっと恥ずかしがっていたのかな。もっとみんなが見ながらみんなの前で発表する様にする。
その場の雰囲気を和ませることができていたか	14	21	1	0	○が多いのは、ともかくみんなが一生懸命やっていたからだと思う。
ごとばづかいは適当であったか	14	31	0	1	○や△がついているのは、みんなが、ていねいに、丁寧に、発表していたからだと思う。
朗読や暗唱はじょうずにできていたか	25	9	2	0	暗唱は、みんなが、頑張っていたし、質問の答えになっていることは、聞いていなくても、答えられていたから、○の数がもっとアップしたかも。
発表に対する感想が見られたか	25	14	1	0	まじめに、聞いていたし、質問の答えになっていることは、聞いていなくても、答えられていたから、○の数がもっとアップしたかも。

V　結果と考察



発表会は、全般的になごやかであった。そして、時々、感心させられたり、笑いを誘われるという場面もあった。

まず感心させられたものに、暗唱がある。ほとんどの者（グループ）が、つかえることなく暗唱していた。また、創意工夫もかなり見られた。例えば、「枕草子」のグループの現代風「うつくしきもの」の発表。これは、現代の「うつくしきもの」を古文に直すというかなり高度な学習であったが、出来栄えがよくて、「あの発表をもう一度」のリクエストがあった。

笑いも、会の雰囲気を乱さない程度に適度にあった。例えば、「今昔物語集」の中の、劇化の場面。「平家物語」の影絵の発表の場面。「徒然草」の吉田兼好の似顔絵の場面など。

単元を終えた時の学習記録に、生徒たちは、このように書いている。

この単元で古典を知ることができ、とても満足している。特に、台本を使っての授業は、これからも忘れることはないと思う。せりふを読み、そして、クラスの人に少しでも多くのことを知ってほしくで、本をたくさん調べたりした。しかも、全く知らなかった話が、手に取るようにわかった時の喜びは、どう表してよいのかわからないくらいだ。もちろん、授業によって古典への興味がわき、私としてはもう一度古典の勉強がしたいと思う気持ちでいっぱいだ。

（I子）

7回もあった発表も、「アッ」という間に終わってしまいました。なんだかとっても残念です。紙しばいをしたり、影絵をしたり、全員がとっても一生懸命やっていたので、本当によかったです。古典は前からやってみたいと思っていたのですが、きっかけがなくて…。これを機会に本を読んでみたいと思っています。

発表を全員が経験しました。1時間中ドキドキでした。本当、クラス全員が一生懸命やれたと思います。

今回の授業では、先生の言われたとおり、聞く力が本当に必要でした。私も、だいぶ、その力がついたような気がします。

それにしても、あの台本、本当にすごいと思いました。とっても細かいところまで目を配ってあって、助かりました。

（S子）

次に、「発表会の活性化」という点について、初めにあげた①学習者理解を深める、②手引きを活用する、③学習訓練を徹底するという手だてがどうであったか、考察をしてみたい。

① 学習者理解……学習者を理解するといっても、いったいどういう点について理解をすればよいのか、いつも悩むところである。そして、結局は、ある生徒の全体を印象でつかんだり、調査（テスト）や能力分析をして、それを元に指導計画を立て、学習を進めてきた。もちろん、これらの方法も大切で、欠かせないものである。しかし、これだけではもうひとつ単元の展開にはね返ってこなくて、せっかくの理解が生かせないままに終わってしまうことが多かった。なんとか、単元の展開にその理解を生かし、そして、学習者自身も生き生きと活動をする、そういう方向での学習者理解というものを探りたかったのであった。

そのために、今回は、予定している学習に関しての興味や知識、能力を把握した後、できるだけ学習に沿って具体的に学習者を個別化してみた。つまり、「この学習を、この子なら、こういうやり方でするだろう」「この子は、こういうこともできるだろう」と、指導計画を立てながらひとりひとりの学習者を想起して近寄っていく。そうして、いったん立てた計画に実際に学習者を当てはめていく時には、能力、個性等をある程度パターン化しておき、そこに適当な者を考えていった。すると、展開の計画のふさわしいところ、つまづきそうなところ、学習が盛り上がり、個性が発揮されるところが、少しずつみえてきた。

今回は、結果として台本を作り、それを元にした学習を組むことになったが、もし上記のような方向で考えていなかったら、おそらくこの台本を使った学習は思い付かなかったであろうし、

仮に思い付いても中身はもっと違ったものになっていたかもしれない。（資料４を例にとれば、学習者たちは意外に「鼻」さえも読んでいなかったし、興味をもっている者も少ないようであった。ただ、「トロッコ」や「父」は既習のもので記憶にあった。そこで、資料のように、既習の作品の題名から入り、「鼻」によって興味をもたせてから、今昔物語に入った。)そういう意味で、学習者理解に努めようとしたことが単元の展開を変え、また、学習者理解が実際の活動に幾分かは反映したと言えるのではないかと思っている。

② 手引き……手引きにはさまざまあるが、ここではプリントに作成したものの中で「発表会」に関する手引きだけに絞って、振り返ってみたい。

「発表会を活性化する」ために、今回試みた方法は、発表の後の「５つの質問」のコーナーである。これによって発表者は、発表のポイントを見つめ直すであろうし、聞き手は発表の要点をつかみながら聞こうとするであろう、と考えた。そして、それ用に作った手引きが資料14・17である。また、資料13の「発表要項づくり」にも当然、影響が出てくるはずである。資料18のようにまとめるにあたっては、自分たちの質問の評価もすることになる。

これらを使用した結果は、ほぼ予想したとおりで、生徒たちはこれらの手引きに従ってスムーズに学習を進めた。手引きそのものについて、あれこれ説明することはほとんどなかった。具体的な学習の進め方と同時に、学習のし方（学び方）についても、はっきりとは目に見えないが理解をした生徒もいたと思われる。こういう手引きを使うと、使わない時よりも学習が個に返りやすくなる。自分自身で読み、判断をするという機会が生まれるようである。

手引きについてはこれまでにもすでに数多くの実践があり、その有効性も確認されているかのようである。しかし、その検証ということになると、非常に難しい。というのは、手引きが本当に効力を発揮するのは、それがきわめて個別的であり、その場かぎりのものである場合が多いからである。手引きの普遍性というような観点で比較したり検討しようとすると、かなりの量の資料が必要である。

学習者が自身の課題をもって手にし、学習活動に取り入れ生かしていくものを教材と呼ぶなら、手引きも教材の一つであると言える。そういう意味で、手引きづくりをする場合も、またその結果を考察する場合も、それを教材づくりの視点から検討するのもひとつの方法ではないだろうか。今後、手引きの評価について、そういう視点でできるだけ客観的に検討をしてみたいと考えている。

台本については、概ねその特性が生かせたようで、調査の段階から発表まで生徒たちがゆったりと落ち着いて学習していたのは、この台本に負うところが大きかったと思われる。こうして振り返ると、台本こそ教材であり、手引きであるという気がしてくる。その作成にあたっては詳しい実態調査や能力分析、深い洞察が要求されるのである。さて、そのように考えると、今回の台本の内容の不備な点がいくつか浮かび上がってくる。まず、全般的に、調査することがらが多すぎようで、生徒たちの中にはそれらを消化するのに汲々としていた者がいた。学習をさらに主体的・活動的にするためには、もっと生徒たちが想像や創作をする部分を増やすべきであった、といった反省点をもつのである。

③ 学習訓練……「発表会」をもつにあたって、次の３点の学習訓練を考え、具体的には矢印以

下のように指導した。

ア　台本の学習に入る前に、発表の仕方に慣れさせておく。→第一次の学習に発表を取り入れ、実際に発表をさせたり見せたり（聞かせたり）して、発表のコツのようなものをつかまえさせた。この時に出演した者は14人にすぎないが、その生徒たちが、後で各グループの発表の際に入っていたということは、目に見えない力となったようである。その者を中心にグループの練習をしているところもあった。

イ　聞き手となった際にどのように聞くかの練習をさせておく　→これも第一次の学習に発表を取り入れることによって、身をもって学ばせた。そして、指導者の質問に答えさせる中で、どの程度のことは確実に聞き取るべきか、どの程度のことは一応の知識として知っておきたいことなのか、ということについて体得するようにさせた。

ウ　準備の際に、個人面接を徹底して行い、朗読の力をつけたり、発表のコツをつかまえさせておく　→資料10のような計画によって、２～４人ずつと個別に面談して徹底して指導をした。１回の指導で済む者もあれば、時には、放課後、再び読んで指導することもあった。

ア、イの指導は、どちらかというと、これまで口頭で説明することの多かった指導事項である。ところが、口頭で説明したのではどうしても徹底しなかった。きちんとできる生徒もいるが、できない生徒も必ずいた。生徒によって、理解に差があった。それに対して、今回のように、実際に体験させる、あるいは、体験を通してコツをつかむようにさせると、生徒のとまどいというものはうんと減った。

ウは、言わばこれ以外に方法のないところ、こうすることが最も良い方法と考えて行ったことである。個別指導をして筆者自身も収穫であったことの一つは、生徒たちはこれを通してグンと自信や安心感をもち、それが実際につけたいと願った力に直接結びついていったということである。

学習訓練にもさまざまなものがあるであろう。今回指導をしたことは、「発表会」に関することの、またそのほんの一部分に過ぎないことは言うまでもない。そのわずかな実践を通して言えることは、訓練がただ訓練に終わらないで、訓練を通して身につけたことが後の学習に直結していくことをもっと考えていけば、生徒も学習にたいして見通しを持つことができ、効果も高まるということである。そのように考えると、こういう学習（学習者）訓練を単元学習の中にどのように取り入れていくかという点は、もっともっと研究されねばならないところである。

以上、これまで３つの視点から考察をしてきたが、実際に「発表会」を支えているものとして、これらの他にさまざまな目に見えるもの、見えないものがある。それらの中で、特に強く感じた点について、次に記す。目に見えるものの中で有効であったと思われるものに、ビデオ撮影がある。これは、「せっかく、熱心に覚えたり、作ったりしたものが、このまま消えてしまうのは惜しい」と、指導者が提案をして、撮影は生徒が行った。そして、撮影したものは、昼食時に全員で見合った。こういった手だては直接、生徒の励みになる。いろいろな生徒がいることを考えて配慮はしなければならないが、有効な一方法であることには間違いない。実際の「発表会」を支える元になるものとして看過できないと思う。目に見えないものの中で最も重要な事柄は、「発表会」及びそれに類する経験をそれまでにどれほど積んできているかという点であろう。その点に

関しては、この生徒たちにはまだ充分な指導をしていなかった。そのために、発表をする際の基本的なことの指導を途中に入れざるを得ず、ちぐはぐした場面があった。今後は、一年生の時から計画的に、小さな「発表会」を度々経験させて基本的なことを身につけさせると同時に、その喜びや苦しみの体験を積ませておきたい。

V　今後の課題

「発表会の活性化」という課題は、国語科だけのものではない。学級でも、また全校活動のような時には学校全体でも取り組まなければならない重要な課題である。しかしながら、やはり国語科においては、それ自体をねらいとしてもっと意識して積極的に取り組む必要があると考える。と同時に、「発表会」をもつ際の聞き手への指導についても、本気で取り組まなければならない時にきている。本校国語科では、現在、「聞く力の育成」をテーマに掲げて模索を続けているので、いずれ、機会を得て報告したいと考えている。

また、視点としてあげた「学習者理解」「手引きの作成」「学習訓練」の３つは、いずれもがきわめて今日的な、そしてとても大きなテーマである。したがって、本実践・研究は多分に概括的、部分的なものであり、今後引き続いて、さらに実践・研究を深める必要がある。

今回の実践を通して、改めて「発表会」を充実させるための単元学習の研究の必要性を痛感した。学習者ひとりひとりが発表内容について深い関心を寄せていて、さらに、ひとりひとりが自分のもてる力のぎりぎりのところで追究しているのでなければ、その「発表会」にはどこか虚偽の匂いが漂うものである。となると、まず学習者ひとりひとりを生かすような、大胆でかつ細心の準備をして指導計画を練り上げていかなければならない。

そういった大きな単元での学習をする一方で、結果と考察のところでも述べたように、一年生の時から計画的に小さな「発表会」を度々経験させて、その基本的なことに身をつけさせたり、成功や失敗の体験を積ませることも大切である。そういう経験の有無が、後の「発表会」の学習に大きな差となって現れるからである。

最後に、古典学習の指導についても一言記しておきたい。今回紹介した単元では「古典について」学ぶという姿勢が強く出ていた。これではどうしても古典作品というものが先にあって、生徒はそれを学習するのだという構えになる。これからの古典学習は、「古典から（に）」学ぶ―生徒自らが課題を持ち、その解決を求めて古典を読む―というふうに発想を転換しなければならないであろう。古典作品をただ敬うのでなく、古典学習のねらいを踏まえつつ、同時に生徒の視点で読むような指導者の目が要求されてくると思われる。

注1.　「國語単元學習と評價法」倉澤 榮吉、世界社　P 81
注2.　同上書　P 31

主な参考文献

「大村はま国語教室③　古典に親しませる学習指導」大村はま、筑摩書房